
かみわざっ！

近衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみわざっ！

【Nコード】

N6601Z

【作者名】

近衛

【あらすじ】

可能を不可能にする業

神業、そんなものがあつたらいいな

そんな風に思ってた子供の頃、でも実際に手にしたらそれはそれでいいもんじゃないのかもしれない。

なんでもありの神の業、一人に一つだけの業、あなたならどんな業が欲しい

オープニングは紛争から（前書き）

初めて書かせていただきます。

内容よりも完結させることをメインとしていきたいです。

暖かい目で見守ってください

オープニングは紛争から

神業：それは神のなせる業、その業を使うことの許されたそんな夢の物語

井の中の蛙大海を知らずなんて諺があるけど僕から言わせれば、井の中の蛙は決してばかにされることはない。

大海なんて知らずとも知ろうとも何にも変わらないからだ。

広い世界を知り、自分よりも強いものを知った所で打ちひしがれるなんてことは、実際はそんなにないからだ。

ましてや井の中の蛙が井の中で自分が最強だとは思っちゃいないさ、いつだって思っちゃいない。

カーテンの隙間から朝の日差しが：なんてごく普通のオープニングを期待していたかもしれないけれど、やっぱり期待には答えられない。

始まりは昨日だ。

モテキなんてものは、漫画や映画の中の話だと勝手に思っていたのにまさか自分に降りかかろうとは：

そして簡潔に今の状況を話すと、二人の女性がまあ同級生（高一）なので女の子と言う表現がいいのかもが僕を取り合いをしている。

普通ならばこんなときどうすればいいのだろう、普通とは難しい何がともあれ、昨日からのモテキ続きで僕の体はボロボロなんだ：もちろん性的な意味は含まれていない。

昨日は八人の女の子に「あなたが欲しいのあなたの命が」なんてラブコールを受けてしまい、いやはや恥ずかしいな！

でも、最近の女子高生はカポエラや柔術、合気道に剣道そんなものを軽々と使えるだなんて時代って怖い怖い。

今日の前でハードな実にハードな殴りあいを繰り広げている女子高生の勝者が僕を殺す権利を得るらしいんだけど自分は許可を出した覚えはないし、ターゲットにされる覚えも全くない。しばらくたって女子高生の紛争が終わった…。

あーついに自分の番が来てしまった、と思いながら重い腰をあげる。
仲月菊花

「なかつききっかか…なんか強そうな名前だなあおい」
ついつい心の声が漏れる。

別に、菊花さんには恨みはないし恨まれる理由もないと思うけど、相手にその気があるならやっぱり戦わなきゃならないんだろう。

「井の中の蛙か…憧れるな」

なんて決め台詞のように囁きながら臨戦態勢をとろうとした。

「紫陽扇歌さんですよね分かりますか私ですよ菊花です」

目の前の美少女が語りかけてきた。

その時予鈴が校内に鳴り響いた。

僕の中ではギャルゲーのオープニングが流れ始めた気がした。

名前なんて呼ばれた日にはそれが青春だよ（前書き）

なるべく内容を濃くしていきたいと思いつつも、頭に浮かんだことを書いてしまう近衛です。

やっぱり始めたばかりでうまく書けずに、設定がふわふわしていますがこの先も是非読んでください

名前なんて呼ばれた日にはそれが青春だよ

長い沈黙が流れる。

まさにしーんって言う感じだった、まあ無理もなく菊花さん側は僕のことをフルネームで知っているらしいけど、僕は全く記憶にないからだでも命を狙われるほど恨みを買っている様なので多分深い仲なのだろう。

沈黙を破るように教師の声、せっかくの女子高生とイチヤイチャタイムをハゲで中年で妥協して結婚したブルドックのような妻のいる教師に邪魔されるなんて、不覚

「休み時間、屋上でまってる」
すれ違い様に菊花さんが行っていった。

まだまだイチヤイチャタイムは続く、胸が熱いぜ言っとくけど性的な意味は含まれていない。

胸は性感帯じゃないからだ。

休み時間が待ち遠しくて全く授業に身が入らない、普段から身が入らないのは変わらないがここ三年間でトップクラスのやる気の無さに嬉しさすら込み上げる。

ついについについについに、休み時間が来た。

お昼の弁当を片手に屋上へ急ぐ、途中に背の低い女の子が廊下で爆弾を仕掛けているのも気にならないほど急ぐ。

屋上の扉を開けるとそこには…

命を狙っていた8人の女性プラス菊花さんがいらっしやった。

「えっと…これは何て言う…エロゲですか」

またもや、心の声が漏れる。

菊花さんがまた始まった見たいな雰囲気を出しながら僕に話をかける。

「紫陽扇歌さん、いやせんちゃんおひさだね」

なんか知らないけど異常にフレンドリーな菊花さんに驚きを隠せず
に沈黙。

「せんちゃんが忘れてるのも無理ないかもね、私とせんちゃんは夢
のなかだけでしかあったことないからね」

余計に意味がわからなくなってきた、確かにこんな美少女を妄想で
産み出したことはあるし、何度か夢で見たことはあるけど。

今考えると不思議なことが一つある。

仲月菊花と言う名前を僕は知っていた、制服に名札がついているわ
けでもなければ名乗った訳でもない。

なぜ名前を知っていたのか、それは簡単なことで初めから仲月菊花
を知っていたから。

頭の中で、夢の中で、そして今日の前にいるからである。

「菊花さん：頭の中では無理矢理整理整頓して見たものの：やっぱ
り納得が行かないんだけど」

そう言われるのを待ってましたと言わんばかりに先走り説明を始め
る。

「まずは簡単に説明すると、昨日からのモテキは私が仕組みました
それはまあ、仕方の無いことだったので、あとは私があなたの妄想
で産み出された訳ではなくあなたの考えに入り込んだだけなんです」
正直菊花さんの説明だと理解するまでに、この小説は終わってしま
うので簡単に説明すると。

昨日からのモテキは僕が本当に紫陽扇歌なのかを試すために仕組ん
だものらしく、そして次に僕が菊花さんを知っていたのは僕の記憶
の中に自分の存在を埋め込む力を使ったらしい。

これが大体の真相だった。

でも答えが出てこない、なぜ僕の記憶の中に来たのかその答えがな
い。

「菊花さん一つ聞いてもいいかな」

菊花さんに訪ねる。

「何で僕の記憶の中に来たのか聞いてもいいかな」

菊花さんは笑った。

なんだかちよつとばかにされている感じもするくらい鼻で笑った。

「そんなの君がよく知っていることじゃないのかなせんちゃんは始まりなんだから」

始まり久しぶりに聞いた、いや、ただ都合の悪いことだから忘れていただけなのかもしれないけれど。

始まりとは、僕の持つ神業だ。

神業なんてものがどこで受け取るのかは知らないけれど産まれた時からつかえた。

その力を皆は恐れた、始まりの力皆は親しみと軽蔑の意を込めて僕のことをスタートラインと読んでいた。

まあ、病院内での話だ。

スタートラインは始まりの力、何兆もの業が在るなかでスタートラインは始まり、全ての業がスタートラインから始まっている。

派生系の業もあるものの、根本はスタートラインから始まっている

「せんちゃんは多分わかってると思うけど、今日から始まるんだよ」
全くもって忘れていた。

今日から始まるのは青春だと勝手に勘違いをしていた、なんて恥ずかしいやつなんだ僕はと自分を非難していた頭の中で。

「せんちゃん：もしかして開戦日わすれてたの」

凶星だった。

嫌なことはすぐ忘れる体質なんだから仕方ないんだけどまあ、その嫌なことをすぐ忘れるのもスタートラインで作り上げた僕の業なのかもしれないけれど。

とにかく全てを理解した。

スタートラインである自分のやらなければならないことも理解した。
僕が殺ることは、神業を与えること相応しい人物に相応しい業を与

えること。

そして神前試合に勝つ事だ。

RPGって基本四人パーティーだよ

お弁当を食べながら菊花さんと話をする。

「とにかくせんちゃんとは自分の代わりに戦ってくれる人をあと四人探さないと半年後にある神前試合に参加すら出来ないんだよ」

菊花さんは器用にカルボナーラを食べながら言う、なんで学校の屋上で皿に盛ってあるホカホカのカルボナーラが在るのかは聞いてくれるな。

「神前試合か、うっすらは覚えてるんだけど…やっぱり戦わなきゃダメなのかな」

別に怖いとか、怖くないとかじゃなく【人に殺らせる】所が気に食わない。

別に、怪我したら可愛そうとかそんなにいい人ではないので別にいいんだが。

気に食わないのは自分が参加できないこと、特段好戦的な性格では無いにしろ自分が参加したほうが手っ取り早いからだ。

相手がどんな業を持っていようが打ち消す業を産み出すことは簡単だからだ。

ここで一つの疑問が生じる。

「僕以外にも始まりがいるのかな」

これだ。

自分の中では答えは出ていた。

答えはyesだ、もしも始まりが僕一人ならば他に業を与えることができる人間はいないイコール僕以外の始まりにつながる。

菊花さんはカルボナーラを食べ終えてからゆっくり口を開いた。

「いないよ、始まりは一つ、スタートラインが何個もあったらダメ

だよ」

予期せぬ答えが帰ってきた。

だったら僕は僕が業を与えた人を倒しにくってことなのか。

理解はできるが納得のいく理由は何一つない、一人で対戦ゲームを二つのコントローラーでやっているようなものだ。

なんだその最先端ひとりあそびは、ワクワクするじゃないか一人遊戯王以来のワクワクだよ。

菊花さんは何かを思い付いたかのように話を切り出した。

「あっ、そうだね敵が明確じゃないからいまいち状況を把握出来ないんだね」

すっごく馬鹿にされた気分だ。

本人にはそのつもりはなさそうだけど、そこまではつきりと現状を見抜かれてしまったらなんだか浅はかな人間性が露呈してしまった気がしちゃう。

こんなことを自分で言う事も浅はかさアピールとしては十分なのかも知れない。

「確かにスタートラインでしか通常は業を与えることできないはずなんだけど、疑似スタートラインを産み出した人間がいるの」

疑似スタートライン

初めて聞くキーワードって訳じゃなくて、以前にも話を聞いていた。男の子からか女の子からか覚えてはいないし、実際は聞いていないかもしれないがその言葉は知っていた。

なんだか時代は横文字っぽい確かに始まりよりスタートラインの方が能力って感じがする。

まあ、こんなことは今考えることじゃないか。

「その疑似スタートラインを作った相手を倒してせんちゃんの本物

のスタートラインにならなきゃいけないの、そうじゃないとせんちやんは消えて疑似スタートラインが本物のスタートラインになってしまう、力を誇示できた方が本物になるんだよ」

なんて分かりやすい実力社会

本物が偽物に負ければ、偽物が本物になる。

本物がいつも本当とは限らないってことか。

消えてしまおうと言う事実を聴いたとしても、僕は戦いに参加したくはなかった。

逆に聞きたい、負ければ死ぬ戦いを赤の他人に任せられるものか、ましてやたった半年で集めた仲間を命を預けるなんて出来ない。

と言う事はあと半年で死ぬのか。

進級出来ないな、まだ青春を謳歌してないな、入学してから三日で死の宣告なんて穏やかじゃ無さすぎるだろ。

もっとラブコメ的な展開を求めていたのに。

部活動とか初めてたらスポコン物に変わってたかもしれないのに。

野球とか良いな。

いやいや、なんか話が変わりすぎてますよ扇歌さん、いや、せんちやん。

自分をせんちゃんと呼んだのは初めてだけど、意外と気分を悪くする。

嘔吐しなかったのが不思議なくらい。

そう言えば、神前試合とやらは誰が開催するのだろうか。

戦わずにしてすむ方法があるのかもしれない、馬鹿馬鹿しい戦いなんて基本は話が噛み合わずに起こることの方が多いんだから、この戦いも話し合いで解決できるかも。

「菊花さんは誰が神前試合を開催しようとしてるか知ってるの」

「神前試合は私が偽物に申込んできたよ、私も戦うから頑張ろうね」

不意をつかれた。

一番の敵は仲月菊花だったのかもしれない。

「その神前試合とやらはキャンセルできないのかな」

我ながら格好の悪い判断だった。

護身自分の身を守る事だけを考えた発言だった。

今では後悔している。

何故なら僕が発言を終えた瞬間に、菊花さんの回し蹴りが僕の首にクリーンヒットしたからだ。

見事に頭の中の悪い判断がクリーンされていく、なんて高性能な掃除機なんだ。

電気要らずで脳内クリーンだなんて、最先端科学もびっくりダイソンもびっくりして吸引力落ちるだろう。

「神前試合をキャンセルしたらあなたは死ぬの、理不尽かもしれないけど疑似スタートライン側はスタートラインが邪魔で、だからあなたを消しに来るきつともう学校内にも刺客はいるの、それなのにあなたはまだそんなこと言うの」

菊花さんスーパー激怒だ。

あんまりふざけたくはないけど、メロスも驚愕するくらいの激怒だ。メロスだってムカついたからといって王さまや、セリヌンティウスに回し蹴りをしないだろうから。

「私は、せんちゃんを守りたくて護りたくてまもりたくてここに来たの、きつとせんちゃんは覚えていない病院であったことを私を助けたことを自分が犠牲になったことも」

自分が犠牲に。

病院で助けた。

あーそうだ。

全部が繋がった。

仲月菊花、産まれた時から大きな病にかかっていた。

体は自由に動かない、言葉は少しは喋れるが聞き取りにくい。

そんな女の子だった。

彼女も僕も親に捨てられた。

彼女は要らない子として、僕は必要な子として実験施設に実験の道具として出会った。

しばらく二人で過ごす内に二人は大分仲良しになってしまった。

仲良くなることは良いことだったけど、この場所においては残酷な事だ。

仲がよかったあの子にもいずれ科学の進歩の犠牲になる日が来るんだから。

その日は意外と早く来てしまった。

その日から三日間僕と彼女の二人だけのRPGが始まった。

そう言えば、施設で彼女とドラクエをやったことがあったけどその時は一人パーティーだったな、僕が勇者で彼女も勇者で。

昔話

記憶と言うものは非常に曖昧で、それでいて簡単に塗り替えられる。無かったことにも出来るし無かったことをあつたことにもできる。

彼女、仲月菊花に出会ったのは幼少の頃だった。

まだ寒くて、日が上るのが遅く遊ぶにはとっても不都合な冬の日遊ぶとか遊ばないとかいっていられる場合ではなかったあの日

彼女と出会った。

実験施設で出会った。

彼女は生まれつき体が不自由で、うまく話すことも表情をすることも出来ない

そんな彼女が実験施設に送られてきた。

用は売られたんだろう。

親に家族に見捨てられたのだろう。

そんなやつらを僕は何人も見てきた。

ここに居るやつらはみんなみんな、邪魔者で家族に捨てられたそんな人たちだ。

僕の場合も例外じゃなく、金と引き換えに売られた。

変な力のせいで

この研究所は、僕の力を他の人の体に移植して人間兵器を作り出す。

それを目的に作られた施設

そんなところで彼女に出会った。

初めは面倒だった。

毎日、毎日聞き取りにくい話し方で怒っているか笑っているかわからない表情で、「おはよう」「おやすみ」そんな声をかけられるのが面倒だった。

そして、嬉しかった。

回りの子供たちは泣きじゃくっているだけでうるさくて困った。

だけど彼女は決して泣かなかった、いや実際は泣いていたのかも知れないが、全くわからなかった。

自分も不安なそんな状況で毎日挨拶をかかさなかった彼女に次第に惹かれていった。

いつか別れが来てしまうそんなことは僕だってわかっていた。

それでも彼女に日が上るのが自分あまりに情けなかったと今は思う。

何日も経ち他愛ない話をするようになった。

もちろんほとんどわからない、何の話かも何を言っているのかもその表情もわからない、そんな彼女との会話がすごく楽しかった。

彼女が来てから4ヶ月が経ち遂に彼女が実験室に運ばれるそんな日が来てしまった。

やっとな出来た友達を失うのが怖い、もとをたどると僕の力で何人も死んでいる。

それでも自分の意思では無かったので全く罪悪感は無かった。

でも今回は訳が違う、大好きな人を自らの力で殺してしまうそんなことが起こるのをまだ子供の僕が「あれは仕方の無いことだ」とは割りきれなかった。

とうとう彼女が実験室に運ばれる。

彼女と目があった。

彼女は僕を見て微笑んでいた、全くわからない表情でこっちを向いて微笑んでそしていった。

「楽しかった」「ありがとう」って

他の人には聞き取れなかったかも知れないが、僕にははっきりと聞こえた。

僕はRPGの勇者みたいになれなくてもいいから、たった一人の彼女を助けたいと子供ながらに思った。

まずは瞬間移動して電源設備と予備電源を破壊しにいった。

電源設備に通常の数百倍の電流を流してショートさせた。

これで彼女はひとまず死ぬことはなくなった、しかしこの次が問題だった。

実験室の扉は中からしか開かない作りになっている、壊すことはできるが、中に居る彼女に被害が出てしまう。

早く決断しなければ施設の異常を把握して警備会社の人間や警察が来てしまう。

今思い付く方法はただ一つ、彼女に自由を与えることだった。

そのあとの事を考えることは全くできなかった、出来たのかもしれないけど出来なかった。

彼女の頭の中に今の状況と体を自由に動かせるようになる力を送った。

まさか扉の向こうの相手に与えられるとは全く思わなかった。

扉が開き、彼女が飛び出してくる。

「ありがとう」

満面の笑みで僕に抱きついてきた、どんなゲームをクリアしても楽しくなかった、でも彼女と一緒にするゲームはクリアできなくても楽しかった。

本当に感謝するのは僕だったのかも知れない、「ありがとう」聞こえないように僕は呟きながら彼女の手を引いて研究所をでた。

行く当てもなく二日間歩き続けた。

足は痛いし、お腹はペコペコだし、重いし。

逃亡後彼女は目を覚まさなかった。

一度だけ「お腹すいちゃったね」とだけ言っていたが起きていたかもわからない。

原因はわかっていた。

僕が与えた力の後遺症

小さな体はその莫大なエネルギーに耐えきれずいずれは死ぬ。

わかってはいたけど、そうするしかなかった。

彼女を助けたいと思ったそれは間違いじゃないし今もおんなじ気持ちだ。

彼女を背負っていた背中はまだ彼女の暖かさが残っていた。

この暖かさも、あの時の笑顔も全てを消さなければならぬのに。

僕は彼女を助けるために残酷になった。

彼女の記憶から僕と力と今まであったことすべての記憶を消した。

記憶に無い力は存在もないのとかわからない、力が発動することはない。

そうして僕は彼女を忘れていった。

これが仲月菊花と紫陽扇歌の出会いと別れだった。

しみりしてしまった。

でもなんで今さら何だろうか

「ちゃんと思ひ出したよ、あの時は本当に悪かった」

とっさに謝ってしまった。

また回し蹴りが炸裂なんだろうなと構えたが菊花さんは笑っていた。

「私は一度も忘れてないよ」

どういうわけかわからなかった。

深くは聞けなかった。

「あなたがどう考えているかはわからないけど、少なくとも私は感謝をしているの、あのままだったらきっと仲月菊花と言う人は居なかったから」

「あー、うんありがとう」

なんだか話が噛み合って無い気がする。
でもなんだか救われた。

あるとき僕は救えていたんだと、決していい人になりたいわけでは無かったけど救えた。

「だから私はせんちゃんのために戦うからね」

「それとこれとは話が違うだろ、負ければ死ぬかも知れないんだぞ」

「あなたのためになら何度でも死ぬ、その覚悟は十年前から出来るの」

僕には返せる言葉は一つしかなかった。

その判断は合っていたのか間違っていたのかなんて神様だって分からないだろう。

「菊花さん、いや、菊花俺と一緒に死んでくれないか」

「初めからそのつもりだよ」

その日僕は本当のスタートラインに立った。

人のために命を張れるなんて素敵なことができる人拳手

昨日までは朝御飯なんて食べなかったに、まさかの菊花の手作り朝御飯だ。

ギャルゲーとか遥かに越えて新感覚エロゲかと勘違いするほどの至福を手に入れた。

きっと今の僕の真相心理を知ったら昔助けられたことを無かったことにされかねない、それだけは避けなければならないので裸エプロンのリクエストはしなかった。

ロマンを分かるのはやはり男だけなのだろうからな。

朝御飯にしてはボリューミーな料理の数々が机を埋め尽くしている。焼肉、唐揚げ、コロツケ、ステーキ、トンカツ、豚骨ラーメンその他：

何年ぶりだろうか、食べ物その他なんてまとめかたをしたのはいや、産まれてから一度も食べ物をその他とくくったことはない：

この料理の総額を聞きたくなるほどの量だ、大食いタレントですら胃もたれを起こすほどの食べあわせだよ。

ちよっとだけ死を覚悟するな。

しかし次々と料理が出てくる、毎日別々に食べたらきつと幸せなことなんだろうけど一度に出てきたらそれはもう核兵器並みの破壊を腸内にもたらす凶器でしかない。

ようやく作り終えた菊花が啞然とする僕に「早く食べないと冷めちゃうよ」なんて言ってくる。

僕の恋心が冷めちゃうよ、なんて冗談を言えないほどにすでに腸内に爆弾を抱えていた。

そうさ、こうやって語っている間にもしつかりと食べていたさ、それなのに一行に減らないもう怖いんだよ：

結果的には半分くらいはなんとか食べ、残りは晩御飯に取っておくことになった。

今夜は野宿をしたい気分だがそんなことを言ったら回し蹴りがまたもや回し蹴りがと考えると腸内に犠牲になっていただこう。

流石にこれ以上のおふぎけは新たな章に入ったのに「なんだよギャグパートかよ」、「菊花さんの裸エプロンゝむはゝ」とかなりかねないのでちよつと真面目に進もうか。

菊花の話によると後五人居なければ神前試合の放棄と見なされて僕の存在が消されるらしい、最近の若者は怖いなすぐに人を殺すからな。

えっ、そういう話じゃないって、わかってますわかってます。

菊花を殺さないためにも自分が生きるためにもここからは【こいつのためなら死ぬる】命を掛け合えるそんな仲間を探すつもりだ。

だから今から菊花に言わなければならない、僕は菊花のためには死にたくない聞こえは悪いかもしれないが菊花のために生きたいと思う。

菊花に死なれるのも、菊花のために死ぬのも絶対に嫌だ。

僕は菊花のために生きて、菊花と共に生きる。

だから菊花には戦いのメンバーから外れてもらうことに昨日の夜決めた。

学校への通学路、そんな重い話をする雰囲気じゃないけれど僕はそんな雰囲気が好きだ。

不釣り合いがやけに綺麗に見えるそんなひねくれている性格だから菊花を仲間としてじゃなく恋人として見ているのかもしれない。

片思いで良いのかもしれない、今はまだその時じゃないからだ。

もし次に菊花を一人にしてしまうことがあったなら僕は僕を殺すかもしれない。

そのくらい菊花Loveなんだ。

殴りあいになるかもしれないが、殴りあいでも済むなら何回だって殴りあおう

もし死んでしまったら殴りあいだってできなくなってしまうのだから。

学校に着くまでに話が出来るのだろうか、僕は未だに話を切り出せずに菊花の話に相づちを打ち続けている。

菊花が味方なら負ける気がしないなんて思っている自分が居る。

愛の力とかそんな形の無いものなのかもしれないけれども不思議と負ける気はしない。

だったら先頭要員として菊花を入れても良いのかもしれない、けど君なら愛する人を戦地に送り込むそんな真似をするだろうか、答えはしないだろういくら勝算があっても確実に勝てる戦いであっても絶対に嫌だと言う筈だ。

やっぱり自分はただの子供なんだ。

自分の命がかかっていても結局は色恋にすべて流されてしまう。それでも良いのかもしれない、いやきつといいんだろうな。

「菊花に話があるんだけどちょっといいかな」

ちようと格好悪く声が震えてしまった。

自分でも理解した、こう言うところが僕が勇者になれない要因難だろうと。

「ん、どうかしたのせんちゃんもしかして…お腹すいたの」

菊花はギャグパートを演じるにはいささか幼少期の経験が黒すぎて自虐的になる。

菊花にはボケではなくツツコミに回ってもらおうかな。

本題から遠ざかってしまうところだった。

なんとか軌道修正した、我ながら見事な腕前で将来はパイロットにでもなろうかと今迂闊にも考えてしまった。

ここで言うパイロットとはペンではなく職業のほうだ。

えっ、向いてないんじゃないかって

それは今僕も思ったところだったよ。
とにかく話を切り出す。

「菊花には神前試合のメンバーから外れてもらうことに決めた」

右か、左か、上か、下か、まさかの後ろかと蹴りを待ち構えていたが菊花はまるでその言葉を僕が言うことをわかっていたかのように笑っていた。

「ありがとうせんちゃん、私は多分そんなせんちゃんだから力になりたかったのかもね別に神前試合だけがせんちゃんの力になれるわけじゃないもんね」

物わかりが良すぎるのも少しだけ気味が悪いけれども、菊花は僕の事は全部見抜いていたのかもしれない。
裸エプロンもばれてるのかもしれないな

「私はせんちゃんの帰る場所になるよ、いつでもせんちゃんの帰る場所に」

こんなに嬉しいことがあるだろうか、片思いでいいなんて事はない
思いを伝えた方がいいなんて事もない、振られるのが怖いから告白
をしない、片思いが辛いから思いを伝える。

どちらも間違っていて、合っている。

誰かにとっての正解は、誰かにとっての不正解
そんな風に出来ている。

そんな世界で生きるためにも後六人

菊花のもとに帰るために

一人目はやっぱりバランスのとれた魔法戦士がいいよね

いろいろあって菊花はサポートに回ることになった。

一応菊花がリストアップしてくれた運動神経抜群の部活動少女プラス少年のリストを見る。

どれも魅力的な女性た…、魅力的な人材だった特にテニス部の胸にはロマンを感じた。

この小説始まって以来の胸の高鳴りと期待と不安と隣に居る菊花の圧力だった。

彼女が居ようと妻が居ようとエロいことに目がいつてしまうのは当然の生理現象だった、頭の中では整理できない生理現象だった。間髪入れずに目にはいる陸上部の独特な衣装だった。

あれは顧問の趣味なのか走りやすさを追求した上でののかはやはり陸上部の顧問しかしりえない特権いや、職権ってやつか昔は夢に見ていたな女子校の体育教師を…懐かしいな。

そろそろ菊花姉さんの眼差しが激しく痛いので真面目に探そうか。

まあ、今までふざけていたもののふざけられたのはすでに見つけていたからだ。

決してテニス部の胸でも陸上部の独特な衣装ではない。

もちろん本能で動くならばその二人は確実に入るのだが、流石に命がかかっている状況で性欲だけでの判断はいささか危険が過ぎる。

剣道部エース

東條真幸【とうじょうまさき】

一度だけ彼と剣道部の練習に参加したが彼は本物だった。

彼は人の道を生きては居なかった彼の生きる道は本当に剣の道だった。

能力を使わなかったとはいえ、普通の人の倍近くの運動量を普通の…半分以下の疲労でこなすことのできる僕が、彼に剣道では手も足も出なかった動きは見えても竹刀は、その竹の剣は目では追えな

ったし手には追えなかった。

そんな彼なら、命を預けるに相応しいと勝手に判断した。でもどうだろうか普通に考えたら人のために命をかけて戦うことに簡単に了承出来るだろうか。

これからがきつと骨が折れることに違いない本当に骨が折れる事がないように今は祈ることしか出来ないけど。

「東條真幸、こいつにしよう実は少し面識がある人だから話をするのは簡単だと思う、後は多少の交渉術と意地の張り合いだ」

「私もその考えには賛成だよ、てっきりせんちゃんは性欲だけで動くと思ってたんだけど意外と性欲を押さえるすべを心得てたんだね」

やはり見透かされていた、命がかかっている状況で性欲だけの判断は出来ないといったがその点でのリカバリは他の五人で十分カバーできると言う算段が自分の中では出来ているから始めに女生徒の信頼が暑く、イケメンの剣道部の若手ナンバーワンを抜粋したのだ。

我ながら見事な判断だ。

流石にこの判断までは菊花も読めないだろう、まずは剣道部の部室に向かうのが一番なんだが口実が全くもって見つからない。

剣道部員にコンタクトを取るにはやはり剣道部入部が第一条件であるに違いない。

クラスや家が分かっているけど、まずは友達からなんてゆっくり友情を育む訳には行かない、ましてや半年で命をかけて戦うほどに分かり合うことは普通なら出来ないことだからだ。

そういう事を色々と考えた上で最善の選択はやっぱり同じ部活で剣を交えることが一番早くそして分かり合える選択肢だ。

東條真幸、誰からも親しまれ、誰からも敬われ、そして誰よりも剣の道を生きる男

そんなやつが味方になったならきつとそれは僕の勝利に限りなく近づくだろう。

後は東條真幸次第と言うことだ。

時は放課後にうつる。

剣道部の部室

入部届を部長に差し出す。

案外あっさりと承諾されてしまった、本当は「やる気はあるのか」「少し剣筋を見せてもらおうか」とか言われたりするのだろうか。よっただけ期待をしていたスポコンは全く起こらなかった。

どこかでフラグをへし折ったのか、初めからそんなことはアニメや小説、漫画の中の出来事にすぎなかったのか。

ちよつと拍子抜けしながらも部活に参加する。

春先なのに剣道着の中は熱かった。

ちよつとしたサウナスーツを来ている感じだ、もつともサウナスーツと剣道着ならサウナスーツを買うが。

剣道は意外とお金がかかる。

剣道はきつと昔は貴族のスポーツだったに違いない、そんな高貴なスポーツをかわいい戦力を手にするために利用していいのだろうか、でも実際には東條真幸を仲間にしたついでに着いてくるおまけのよな物だから直接的な関係はないから大丈夫なんだろうけど。

結局は全ては持論だった。

もしかしたら別に高貴なスポーツでも無いかもしれない、棒を振り回すなんて野蛮極まりないそんな風にも解釈できる。

まあどちらにしろ今さらになって校内に爆弾を仕掛けている少女を思い出した。

三階の屋上用非常階段の近くに爆弾を仕掛けていたあの少女を。

剣道とは心を整理するにはもってこいのスポーツだと自覚した。

その時にターゲットだった東條真幸の方から僕に話をかけてきた。驚いて今なら竹刀でギガスラッシュが放てそうだった。

まあ、あんまりドラゴンクエストには詳しくはないが多少の知識がある僕だからやっぱり火炎切り程度にとどめておくべきだったかなと、突拍子のない自らのボケにたいして反省をする。

「貴様がまた剣道部の門を叩くとは思ってはいなかった、意外と真のあるやつだったんだな」

正に武士のような精神の持ち主だが、僕だって命がかかっていなければもう二度と東條真幸とは戦いたくはない。

負けが見えているからだ。

いくら練習しても半年では足元どころか同じ土俵にすら上がれはしない。

それほどにまで人間ばなれした人間。

「まあ、命懸けだよ」

ちょっとだけ格好をつけて東條真幸に言い返した。

この一言が東條真幸に火をつけてしまった。

火に油を注ぐと言えば違うけれど何らかのスイッチが彼に入ってしまったのかもしれない。

武士ならば命懸けの戦いはやはり燃えるのだろうか、僕は早く萌えたいと願う。

真面目な話をするとうしろいことを話しにくくなる。

特別好きなわけではないけどエロとは力に変わる時がある。

リフレッシュには最適なんだ。

その日の部活は多少の顔合わせで終わった。

こんなペースで半年で六人集められるのかは不安だったが、その日の帰り意外な人物を目にした。

そうだ。

あの、東條真幸をまさかの少女漫画コーナーで発見してしまったの

だ。

やはりエロは素晴らしい、エロ本エリアから少女漫画コーナーはすべて見渡せる。

エロ本なくしてはこの出会いはなかったのだからエロ本万歳な訳で、エロ本はもう肩身の狭い思いをせずに存分にその内部をさらけ出していいと思う。

ちょっと遠くからの菊花姉さんの眼差しが先程よりも鋭く痛い、まるで目からビームが出ているようだった。

少女漫画を読むことは決して悪いことじゃない僕は読まないけど

見つけたのはいい話をかけられる状況ではないような気がする。

仮に僕が少女漫画を愛読書としていたとして、それを同じ部活の人間に知られたいだろうか。

僕は絶対に御免だ。

もしばれたら部活をやめるだろう、そのくらい現代の若者は回りの目を気にする。

ましてや三年間ともに汗を流す仲間知られたら学園生活を棒に降るも同然だ、ここは知らないふりをして帰るのが最善だろう。

その時僕は勘違いをしていた。

東條真幸の人間性を、強度を、度胸を、感性を全くと言っていいほどに勘違いをしていた。

ここまで勘違いをしていたらもう騙されていたと言っても過言ではない。

何故なら菊花姉さんのプロファイリングでは剣道部の男の子、女子に大人気、個人的にはあまりタイプではないと聞いていた。

菊花のことをちょっとふざけて姉さん扱いをしたがちょっと面倒なのでこれからは時と場合によって使い分けよう。

どんな隠蔽工作をして、どんなに他人を演じようが必ずぼろが出る。

学校側はデータを持っているからわかる筈だが、あそこまで完璧に男ならばもしかしたら出生時から男として育てられたのかもしれない。

真幸と言う名前も女でもあり得るし、男でも不便はしない。

東條真幸は【女】だった。

正真正銘の女の子だった。

どこにでも普通にいる、少女漫画の先が気になりお小遣い前だから買うことができずに店先で読んでその展開に心踊らせ、頬を赤らめ、自分もそんな恋に落ちたいと思う。

そんな女の子だった。

それがわかった以上事情が変わった。

話をかけよう勇気を出して、僕の勇気なんてたかが知れているがはたから見たらただの同級生の会話にしか見えない、ましてや僕は人の目を気にするような人間ではない。

人の目を気にする暇があるなら自分の視力を大切にするそんな自分本意な人間だ。

ランナーより目の前のバッターと戦う、そんなタイプだな。

まあ、野球はやったことはないしこれから先野球部に入ることはない筈だ。

いくらかわいいマネージャーが居ようが絶対に僕は野球部には入らない。

今日の部活でわかった、汗をかくのは素晴らしいことだとそしてわかった、汗をかくのは素晴らしく僕には向かないことを。

次に入るなら間違いなく水泳部だろう、何故ならそこはパラダイスだからだ。

ちよつと無駄な話がすぎてしまった。

僕的にはこういう風に話をいい加減に延ばすのはすごく楽しい、正に適任自分に適した任務だと思う。

それでもやはりストーリーを進めると言う根本的な目的を達成しなければこの仕事は二度と来ないだろう、ハローワークに通うのはもうんざりなんだ。

もちろんハローワークに本当に通った訳じゃない、作者がそんな話を作らない限りは僕は就職すらなくてすむ。

これ以上はこの物語から排除されかねないので東條真幸に話を…なぜ今まで気がつかなかったのだろうか、それとも今話をかけられていたのだろうか。

エロ本コーナーで僕は見た目は男の子、声はかなり高め声変わりをしていないと言えぱそれですんでしまうのかもしれない、だけれど中身は少女。

そんな東條真幸が目の前で僕を呼んでいた。

「おい、貴様気付かないのか、それとも私が見えないと言うのか」

僕は自分のことを我ながらバカだと思った。

我ながらを最近多用している気がする、もしかしたら僕の口癖は【我ながら】なのかもしれない、別に自分のことを我とは言わないけど。

「あー見えないなあ、とても女の子だとは思えない未だに信じられないよ」

最近僕はやられ役に徹している気がする。

今考えると【気がする】も口癖なのかもしれない、それはさておき僕の頭は無事らしい。

説明をするよりも現状を、現象を理解してほしい、僕は言わなければいいことを言った。

それは誰にでも理解できること、その後に僕は頭に激痛が走るかと思っただけだ。

実際は痛くも痒くもなかった、いやもしかしたら痛かったのかもしれない激痛を遥かに越えた一撃だったのかもしれない。

気がついたときには僕の目の前にいたはずの東條真幸は消えていた。いや、消えてはいなかった。

敵を切る為に距離をとったと言うのが正しいのか、でも確実に一度は目の前から消えたのだ。

そしてー

次の瞬間には目の前は竹刀だけだった。

こんなに近くで竹刀を見る機会は無いだろうからみんなに教えてあげよう。

竹刀の先は真っ白だ。

最初はマシュマロかと思うくらいに真っ白だ。

「誰から聞いた…紫陽扇歌」

初めて名前を呼ばれた喜びよりも、目の前のマシュマロ：いや、竹刀の威圧感と気にしないはずだった回りの目で口を開くことができなかった。

僕はとりあえずアイコンタクトで表で話そうと東條真幸に送った。

流石の東條真幸もこの回りの目があるなかでは話がしにくいだろう。

「私はここで話したいのだが、きっとその目配せは外で話さないかと言うことだろうがこの時間は春と言えどもまだ寒い、体が冷えるからここで話せ」

僕は啞然とした。

もちろん東條真幸の発言にも啞然としたが自分に啞然とした。

この場合は場所を移そうとするのが目的なので、寒いところが嫌ならば店内のカフェにでも行こうと誘えばよかった。

「女の子は冷えると大変だもんな」

目の前が真っ暗になった。

目が覚めたらポケモンセンターかなと考える暇もなかった。

和風なポケモンセンターにはやっぱり剣道少女がよく似合う

真っ暗と言うのは案外楽なものなのかもしれない、なにも考えなくてもいいしなにも起きないのだから。

ただ真っ暗と言うのは痛い。

暗黒なんて中二の病じゃないか。

痛くて痛くて見ていられない、真っ暗だからなにも見えないから見ていられないものもないのだけど。

まあそんな真っ暗になった僕の意識はもう戻っていて普通に起きることが出来るんだけど、周りの様子がおかしい。

薄目で周囲を確認する。

菊花が隣に座っている、これは昨日からいたって普通の出来事だ。

ここが自分の家ならば問題がない。

でも僕の家は床は畳みだし、菊花が僕を畳みに放置することは絶対がない。

壁にはたくさんの賞状、綺麗に磨かれた床に僕を貫いたマシユマロ。多分、東條真幸の家だ。

しかし東條真幸自体はどこにも見えない、菊花が近くで座っているので見えないだけかもしれないけれど気配も感じない。

もしかしたら膝枕でもしてくれているのかと期待をして見るがひんやり冷たい床だ。

お腹川冷えると今日の朝御飯の残りが食べきれないといけないので、早々に立ち上がった。

当然の如く菊花の抱擁を受けて「心配したのよ」的な激励を受ける。実際はかなり長く話をされたので九割はしよかった。

「目を覚ましたようだな、先ほどは大変すまなかった」

意外な言葉だった。

てつきり「他言無用、命がほしくば忘れるがいい私は貴様がここで死のうが関係はない」

なんて言葉をかけて頂けると思っていたのにとんだデレデレちゃんだ。

ツンが足りなすぎる、ツンデレならば流血するまで殴っていたかなければ。

最近僕のキャラ設定が変わっているような気がするな。

まあ、慣れ親しんだ友達に素の自分を見せていると思ってくれて結構だ。

若干人見知りな主人公が成長をして、自分を上手く表現出来るようになったら実際はただの変態だった。

それだけだ。

「いや大丈夫だよ、よく言うだろ本当のプロはデッドボールなんかじゃないって当たったやつにも責任はあるよ、避けてやれなくて悪かったな」

ちょっと格好をつけたように聞こえるかもしれないけど実際本音だ。気を抜いていた訳ではないけれど避けることは出来た。

剣道着を着ていれば避けられなかったけれど、剣道着がない状態なら見えなくても軌道やなんやらで、避けることは出来た。

ただ避けてしまっただけはその場で話すことになっていたから避けなかった。

故意落球の剣道バージョンだ。

故意落球とは君たちのGoogle先生に聞いてこよう。

僕の説明は故意に落球したんだよだ。

分からないだろう。

説明をする気はないから、だって説明は難しいから無理です。

「そう言ってもらえると助かる、時に紫陽私が女とはどういう事だ」

「少女漫画読んでたし、声高いし、それにやっぱり女なんだよな」

「全部憶測の域で物を語るな、紫陽の見解では私は少女漫画が大好きな変声期を迎えていないイケメン剣道部じゃないか」

「エロ本読んだことあるか」

「えっ、エ、エロ本なんて読まない」

「剣道ばかりのお嬢さんにはまだハードなエロスは早すぎたようだな」

「私は、剣の道に生きる者としてそんな物をたしなむ気は毛頭ない」

あと少し、あと少し菊花姉さんの眼差しに耐えれば東條真幸が女だと言う事実にとどり着ける。

わかってくれ菊花姉さん。

僕はエロスの伝道師何かではない、交渉と言うのはもっとも相手が欲しい条件をだすか相手がもっとも嫌がる条件をだすか、それしかないんだ。

まあ、多少の綺麗事はあるかもしれない

髪を長くして化粧をしてすかーとをはいた東條真幸ちゃんを少しは想像してしまったさ。

初な女の子とエロい話をする雰囲気には浸っていたさ。

でも竹刀で殴られて意識を飛ばされたんだから少し位は許してくれ。菊花は仕方ないと言う顔をしながら見ている。

今回だけは許してやるそんな感じだった。

しかし敵は東條真幸や菊花だけではなかった、東條真幸の家の道場ならば居て当然の相手だった。

今まで気配もしなかった、今でも錯覚だと思うくらいの存在感だった。

気配はない、だけどそこにいた。

認識をした瞬間、それはそこにいたのではなくそこで起きていた。それは人物ではなく現象だった。

東條剣菱【とうじょうけんびし】

東條染傷流道場当主

東條染傷流、相手を傷で染め上げる剣術

その体から滴る血よりも傷の方が多そうな剣術

「そやつは我が娘だがなにかもんだいはあるのか小僧」

その一言だけで僕は気絶していたかもしれないそれほどの威圧感だった。

スタートラインに初めて感謝する。

二人の美女の前で格好悪い姿は見せられないからな。

「お父様、私は男です、立派な男です」

東條真幸は必死に訂正をする。

僕にではなく自分の父である東條剣菱にむかって。

「真幸よ、真実を知っている相手を欺くことは出来ないだから、小僧に叩き込む東條真幸は男であると理解させる」

自分では全くわからなかったけれどバトルパートとはこんなに突然と来るものなんだ。

覚悟はできていた、半年で死ぬと聞かされた時から覚悟はしていたが相手が悪い。

東條真幸よりも東條剣菱を仲間にした方が勝てる気がするが、やつ

ぱりそこは東條真幸がよかった。

別に女の子だからじゃなくて

剣道場の跡継ぎとなるために自分を殺した。

そんな東條真幸が可哀想になったわけでもない。

ただー

少女漫画を立ち読みじゃなくて、買って帰れるそんな些細な幸せを
味わって欲しいとおもったからおもったからこそ、東條真幸に命を
掛けたい。

あのイケメン剣道部に。

バトルパートの前に修行がないなら負けていいよね

成り行きとはいえ簡単に僕を殺せるだろう相手に正解どころか始解も出来ないましてや死神代行でもない僕が勝てるわけがない。

最近は平和ボケでジャンプばかり読んでいたのがばれてしまうな。予期せぬ事態では無いにしろ相手がここまで好戦的な性格だったのはそこそこの誤算だった。

いや、もうご破算だった。

願っちゃったよご破算。

僕の遺書の締めとしては何かしっくり来ないボケだったけれど、たまには命を軽く扱うのも悪くはないのかもしれない。

どこぞのサイヤ人ではないから別に相手が強くて胸が踊ってる訳じゃない、何だか本当に理解し始めたのかもしれない。

東條真幸の辛さを一度死んでいる東條真幸の苦しみが辛さが喜びが。だから最悪僕は負けてしまうのもありなのかもしれない。

勝っても東條真幸が女として扱われるなんてことは無いかもしれない、ましてやそれを本当に東條真幸自体は望んでいるのかも。

やっぱり自分本意な人間だ。

それでも部活で疲れているのに少女漫画を立ち読みしていた彼はやっぱり彼女であるべきなんだ。

僕は自分の考えを押し付けて、擦り付けて生き続ける。

さあ、始めよう。

意地の張り合いを考えの押し付け合いを

僕は菊花に遺言を一言残す。

「晩御飯：残したら怒るか」

「大丈夫だよ、せんちゃんは何を食べ物を粗末にはしないから」

菊花には参った。

まあ、好きになった時点で十年前にはすでに参ってしまったのだけれど。

そんなこと言われたら、食べ物も菊花の思いも粗末には出来ない。だから今だけは命を粗末にすることを許してください。

誰に思ったかわからないけれどそんなことを思った。

「東條真幸、僕はお前に宣言するお前を女だとここにいる全員に認めさせるいや、理解させてやる」

「意味のわからないことを抜かすな、私は男だどこからどう見ても男だ」

「だから、もし僕が勝ったら今すぐ少女漫画買いにいこう」

僕は東條真幸の言葉を聞いて、受け入れた上で話をした。

その瞬間の東條真幸の顔はいつになっても忘れない、正真正銘の女の子だった。

勝てるわけないけれどそれだけで死ぬには十分な理由だ。本当に死ぬ気はない、ただここで命を懸けたことに意味がある。

ついた傷の数だけ、命は重くなる。

だから支えてもらおう東條真幸に。

そして僕は前に立つ、明らかに自分よりも格も年も能力も遥かに上の相手【東條剣菱】の前に。

すでに戦闘準備が整っているだろう相手を目の前に不思議に臆することはなかった。

殺気は十分に感じている、敏感な体を持ち合わせているわけではないけれど確実に全身を針で刺される感覚に快感すら覚え：ていません。

たまには真面目な部分を見せてやろう。

僕は臨戦態勢に入る。

そして僕は一瞬にして背後の壁距離で言うところと十五メートル近くはなれている壁にズドンと行った。

ジャッキチェーンもビックリのスタントだったに違いない。

とっさに後ろに跳んだものの、その剣圧に風圧に弾き飛ばされた。背骨が折れるかと思った。

もしかしたら折れているかもしれないでも今はさほど気にならないどころか、ベストコンディションと言っても過言ではない。

実際はどの辺がベストなのかは全くわからないけど。

きっとそのスタートラインを使えば簡単に勝てるだろうが、使ってもそれは意味がないような気がする。

全くスタートラインを使っていないと言えば嘘になってしまう。

この体だってスタートラインの反動に、後遺症に耐えるために鍛えられた体なのだからやっぱり意味はないのかもしれない。

そんなことを考えている間に僕のお腹に竹刀が刺さる。

感覚的に刺さる。

血が飛び散る感覚が体を巡る、そのくらいの突きだった。だけど捉えた。

確かに僕の手は東條剣菱の竹刀を捉えた。

ちよっと犠牲は大きかったが確かに勝機を見出だした。

「見上げた根性だな」

「見下げた突きだな、痛くも痒くもない」

はったりも減らず口もまだまだ健在だ。

けどやはり少々無理をしすぎた。

完璧に晩御飯を食べることを忘れてしまっていた。

粗末には出来ないのにな。

勝っても負けても晩御飯は皆で食べたら美味しい

戦いの最中だつて言うのに冷静な判断ができている自分に驚きだ。肉を切らせて骨を断つ、そんな手法を僕がとるなんて思わなかった。それでも離さない、掴んだ光は決して離さない二度といや一度たりとも誰に頼まれても離してたまるか。

僕は精一杯の力を振り絞り竹刀ごと東條剣菱を持ち上げる。

全力で全身全霊を費やし持ち上げるが、やはり無理だった。

このままでは初めから分かっていたけど勝つことは出来ない、そして握力も持たない。

内臓を軽くえぐられている。

そんな状況で握力もなにもない、あーそろそろ頭がくらつとしてきたかもしれないカッコ悪いなああカッコ悪いな。

伊達眼鏡ってかっこいいな。

損なことしか考えられない、なんだか目が冴えてきた。

頭は働かないけれど目が冴えてきた、今なら見えるかもしれない本当に大切な見落としていた事実をこの目で。

「なあ、東條剣菱さんよお」

「なんだ死に損ない」

ちょっと笑ってしまった。

小僧から死に損ないへのランクダウンに思わず笑ってしまった。最近ギャグを減らしたせいか下らない事で微笑んでしまった。我ながらナイススマイルだった。

シェフもビックリせんちゃんスマイル

「あんたは男であることに誇りを持ってるか」

「当たり前であろう、男でなかったら今の我は居ないのだからな」

「そうか、僕は全くないんだよ男でも女でも多分自分の生きた方は変わらない」

「男に生まれなければ出来ぬこともあるのだよ、少しは世界を知れ」

「性別で判断されるそんな世界は知りたくない、それが世界なら僕は一人でも世界を的に回してやる」

「でかすぎる発言は身を滅ぼす事を覚えておけ井の中の蛙よ」

ランクアップか、死に損ないから蛙になった。

蛙には蛙の世界がある。

世界に適応した人間が生き残るのならば死んでも構わない。
ただ僕は蛙だ。

「なあ、空って青いつて知ってるか」

「口の聞き方に気を付けろ」

「僕は知ってるんだよ、蛙なんだからずっと井の中から見続けた憧れていた青空を」

僕は竹刀を離した。

次に竹刀で突いてきた時が最後のチャンスだ。
相討ちならば出来る。

「なぜ離した、勝機は初めからなかったが諦めたか」

「諦める…かそれも悪くないのかもしれない、だって負けたとしても勝ったとしても僕にとっては彼はもう彼女だからなにも変わらない、決してここであなたに考えを押し付けられても僕にとっては彼は彼女だ」

「初めから戦う意味はなかったのか貴様には…」

「戦うつもりはあった…でもそれは単なる僕の意味表示だ」

「なんの意味だ」

「僕は東條真幸を東條真幸の人格を命を懸けて守ると言う、そんな意思表示だ」

「下らない」

「僕も下らないと思う、でも下らないことができる自分が大好きだ」

「真幸の為になぜ命を懸ける」

「回りくどいことは言わないただ僕は少女漫画と一緒に買いたいただそれだけだ」

一気に周りが白けた。

緊迫した空気は続いても殺気を感じない

東條剣菱は僕を見てはいなかった。

目線の先には涙を流す東條真幸が居た。

今まで押し殺していた感情が溢れ出すように。

その顔はもう年頃の女の子だった。

「貴様、名前は」

「紫陽―紫陽扇歌」

「紫陽扇歌よ、娘を任せたぞ」

僕は気絶した。

あのバカ親は最後の最後に全力で僕を切った。
全く記憶になかった。

気がついたら四人で食卓を囲んでいた。

東條剣菱、東條真幸、菊花に僕
謎のコラボだった。

会話は全くない、僕に至っては食欲も全くない完璧に内臓がい
かれてる気がする。

後々話を菊花から聞いたら詳しい話は菊花から上手く話したようだ
った。

そうしたら東條剣菱は「あの男ならどんな戦いでも負けることはな
いだろう、真幸あの男は本当の強さを知っている生かす強さを」

なんて事を言っていたらしい、全くもってあの人らしいが僕はそこ
までの人ではない。

僕は殺す弱さを受け入れられないだけなんだ。

明日は、菊花と真幸と少女漫画を買いにいこうやっぱり君に届けか
な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6601z/>

かみわざっ！

2011年12月24日02時47分発行